

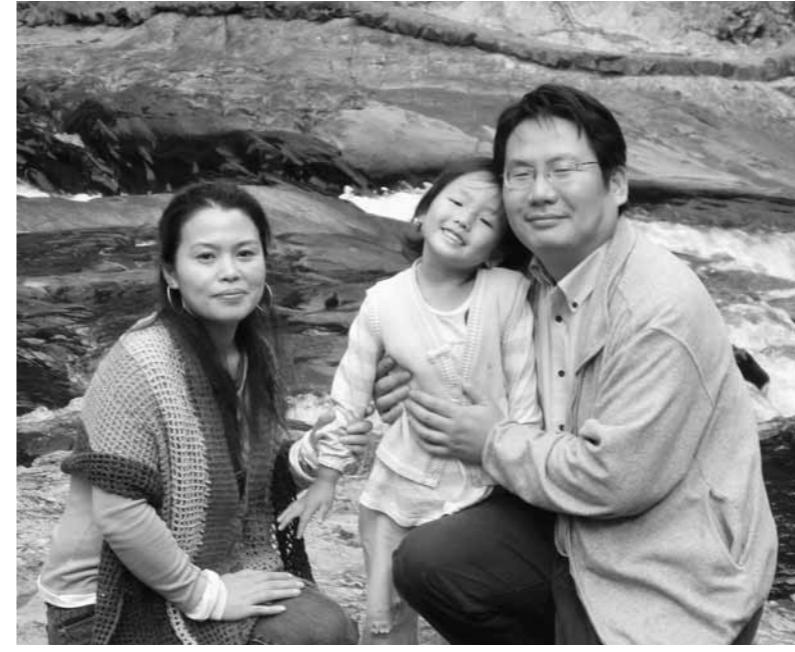
おおだ暮らしを楽しむ

大田市へのUターン者数は、平成22年度が23世帯、54人、今年度は、22世帯、64人となっています。(平成23年12月末現在)

移住のきっかけは様々です。しかし、移住はその人の人生を変える大切なイベントです。何が起点となるのか、これまでに大田市へ移住された方の中から、お二人の「おおだ暮らし」を紹介します。

クオリティ・オブ・ライフ！

移住は、人生観『生き方』の選択



▲妻の王敏さん、3歳の愛子ちゃんと3人家族で、邑南町の断魚溪へ出掛けたときの様子です

日本の生活から なんとなく中国へ

■神奈川県横浜市出身
小林 久夫さん(38歳)

小中学生の頃は、父が転勤族で北海道から関西と転校をしていたという小林さん。大学を卒業して、JA中央会に就職、地方のJAとの繋がりも多く、島根県にも仕事で幾度か訪れたことがある。根っからの都会育ちでしたが、通勤時間が長く、夜も終電間際に帰宅といった生活に疑問を持ち、9年間努めた職を辞め、中国へ渡る。

特に目的も無く移住した中国では、日本語教師や日系企業の現地雇いなどの仕事に就き、大連から瀋陽など4都市での生活を送り、その間、妻の王敏さんとお会いし結婚、長女の出生を機に2年半ぶりに日本へ帰国した。

移住への思い 島根人との出会い

帰国後、サラリーマン生活に戻った小林さんは、中国での暮らしが身体にしみ込んでいたらしい。

偶然、秋葉原で開催されていた全国農業会議所主催の農業人フェア会場へ入ったとき、

か、益々町の歴史と神楽に惹かれ、卒業を機にNPO石見ものづくり工房(金崎理事長)の島根おこし体験事業での人材募集に応募した。

東京の父母からの「まず社会勉強をしてからでも遅くはない」という言葉に、「今、やらないと、もう出来ない」と両親を説得。平成23年4月から、NPOの一員として活動を開始した。

空気の違う東京から 日々挑戦の時

町の魅力に惹かれて、大田市へ移住後、一年が経つ。

やきもの館では、様々な興味をもつて温泉津に訪れる方々に、少しでも納得のいく情報提供ができるよう、自分自身もつと温泉津を知りたいと、日々実体験をしながら、接客業に反映している。

初体験の釣りや農作業も神楽舞につながり、民族的な文化を感じている。

こういった文化や自然環境がある地域に住めて幸せというのが、窪田さんの価値観であり、挑戦の日々を送っている。



▲石見銀山建設(島根県)で、経営企画部の新規事業を担当する。主にISO、廃棄物処理、入札、渉外など許認可事務だが、中国への新規事業へもチャレンジする会社の橋渡し役として、大きな期待を背負う小林さん。大田市への移住後、仕事に追われる毎日だが、「クオリティ・オブ・ライフ」を満喫している (写真: 仕事場での小林さん)

自分本来の生活を 自由気ままに

当初は単身で大森町での生活でしたが、居住基盤が整った昨年3月、家族を呼ぶことが叶い、現在、仁摩町で暮らしている。

中国人の妻、王敏さんは、当初、移住への不安がありましたが、地域や子どもたちとの繋がりに慣れ、生活を満喫している。

「最初からアイラブ島根ではなかった。田舎は捨てたもんじゃない。気に入ったところへ気ままに住むこと」と、現在の生活を楽しんでいる。

島根県の定住パンフに目が留まり移住を考えるきっかけとなり、にほんばし島根館へ出掛け、ふるさと島根定住財団への登録を行った。

また、それ以来「回帰フェア」などへも出掛けたが、会場での対応がひと際良かったのが、島根と秋田だったとか。担当者の対応の良さが、島根県が一番だった。

その後、財団からある建設会社が海外貿易事業を考えているので面接してみないかという連絡が入り、早速、島根県へ向かい、石見銀山建設(株)黒田社長の熱意に打たれ、平成22年8月、大田市への移住を決定した。

考えるより、まず『行動!』

動いて分かることが多い

舞台芸術を目指し 石見神楽に衝撃

■東京都練馬区出身
窪田 真菜さん(23歳)

幼少よりHIPHOPダンスに熱中する中、舞台芸術に関心を持ち、東京から京都の造形芸術大学舞台芸術学科に入学。京都という風土にも憧れ、学生生活を送るなか、温泉津町での「海神楽プロジェクト」へ興味本位で参加した。

石見神楽は、その華々しさと舞台表現をいとも簡単にしている。それも皆地元の人々で構成されており、普段の生活の中にある伝統芸能に強い衝撃を受けたという。

神楽への魅力 動かずにいられない

「石見神楽」に出会って人生観が変わったという窪田さん。大学の4年間、温泉津町の地域の人との交流をするな



▲農業体験の無い窪田さんは、地元酒づくりグループの世話人会へ加入。今秋、「亀の尾」の稲刈りに参加し、汗だくになりながら、ヨズクハデの制作に初挑戦。(西田ヨズクの里にて)

提言したい一言

【小林久夫さんから移住希望者へ】
田舎へ住みませんか? だけでは人は来ない。移住希望者には、どこの町も同じように見える。元々ふるさと意識が無い私には、住みたいところを決める手段は、人生観であり、生き方に繋がってくるのだと思います。「クオリティ・オブ・ライフ」をどう感じ取るかだと思います。

【窪田真菜さんから若者へ】
若いゆえに何でも出来ると思います。今は、自分が役立てるポジションを探すため一生懸命です。単に身体表現だけでなく、心の内を表現できるような人になりたい。自分の「生き方」をどう表現していくかが、私を含め若い人達の今後の課題になると思います。



▲NPO石見ものづくり工房(温泉津町)で、地域コーディネーターを担当する。普段は、「やきもの館」の管理運営に追われ、地域との関わりも薄いというが、休暇には、出来るだけ他の市町へ出掛け、情報収集をしている。震災以降、「価値観」が変わり、原点に戻ることを痛感したという (写真: 仕事場での窪田さん)